

2011年「秋のJBA」講義録

まだ見ぬ〈今〉へ



木本 伸（ねこ）

まだ見ぬ〈今〉へ（「秋のJBA」案内文より）

みなさん、はじめまして。今回の会座では「まだ見ぬ〈今〉へ」というタイトルで話をしたいと思っています。今は、何の不思議もない時間です。過去はすぎさり、未来はまだ来ない。だけど今は、いつでも、ここにあります。頭をひねって昔を思い出すこともなく、先のことをあれこれ想像する必要もありません。いつでも今は、ここにあります。

でも僕たちは、ほんとうに今に出会っているのでしょうか。つまらない失敗をして落ち込んだり、将来の不安で気持ちがふさがるようなことは、ありませんか。あるいは、だれかや何かを自分の道具にしてしまうことは、ありませんか。そんなとき、僕たちは青空のように広い今に背を向けているのです。僕たちには、まだ見ぬ今に出会いたいという、こころの底からの欲求があります。だけど、小さな思いに執われて、この「こころの底の欲求」にたどりつくことができないのです。

会座では、みんなで念仏しますね。名号（念仏）とは、純粹な今からの呼びかけなのです。どうか、ほんとうの今に目覚めて欲しい。そう名号は呼びかけます。その声に気づいて、僕たちは「ありがとう、ずっと長いこと今を忘れていました、これから今を生きていきます」と応えます。それが僕たちが称える念仏なのです。

まだ見ぬ今へ——それを先人は往生浄土と呼んできました。まだ見ぬ今に出会いたい。それは、すべての人に通じる願いです。ですから、その願いは、たくさんの歌や詩や映画となって表されてきました。そうした願いの断片は、僕たちのこころに響きます。それは、こうした願いのかけらが、こころの底の欲求を目覚めさせるからでしょう。仏法は今をひらく教えです。会座を通じて、僕たち自身の今に出会っていければと思います。

I

愛情という大地

みなさん、おはようございます。まず、こんな話から始めたいと思います。人間が生きていくのに必要なものが三つあります。さて何でしょうか。まずは初めの二つ。それは栄養と睡眠です。栄養と睡眠は生きていく上での基本的な条件です。この二つが不足してくると、人間はいらいらして怒りやすくなります。だから栄養と睡眠に過不足がないことは、安定した毎日を送るうえで、とても大切です。だけど、もうひとつ大切なものがあります。それは愛情です。でも愛情なんて、どこにあるのでしょうか。あたりを見回しても、どこにも見えません。今、みなさんは、こうやって僕の話聞いてくれています。実はこんなふうに落ち着いて話を聞くことができるのは、愛情が足りているからなのです。受けるべき愛情が欠けていたら、普通に生活することができません。そんな意味で愛情とは、ふだん意識しない足もとの大地みたいなものです。普通に歩いているときに、大地を意識することはないでしょう。地震などで大地が揺らいで歩けなくなる、そんなときに初めて意識するものが大地です。愛情も、ふだんは意識しないけれど、僕たちが生きていく上で欠かせないものだと思います。

仏法を聞くことは、自分を学ぶこと

このような仏教の会では何を学ぶのでしょうか。それは愛情のように、目には見えない世界を学ぶのです。見えない世界といっても、他にもいろいろあります。素粒子の世界とか、宇宙の彼方、それも見えない世界です。過去の歴史も見えないし、世界経済の動向も見えませんが、そうしたことは、それぞれの学校や研究所で学びます。この会では自分自身について見えない世界を学ぶのです。だから、本当におもしろいのです。たとえば歴史の授業で、全然自分に関係ないような時代や人物について習うのは、おもしろくありませんね。せいぜい受験のためとか自分なりに位置づけないと、やる気が起きないでしょう。だけど仏教の話は、一見、わけがわからないようで、すべて自分に関係しているのです。だから、ものすごくおもしろいし、はまる人が出てくるのです。いわば自分自身の事実を発見していくのだから、これはおもしろいのです。みなさんのまわりにも、仏教にはまっている方がおられるのではないかと思います。そうした方々が「ぜひ、あなたもはまってください」ということで、このような会に若い人を送り出してくださるのです。

仏教の話聞くということは、どこか特殊な世界に入りこむことではありません。むしろ今こうして生きていることの実事を知らされていくのです。しかも見えなかった世界が見えてくるのだから、「ああ、なるほど」という驚きがあります。もちろん、毎日が驚きの連続というわけにはいかないでしょう。しばらくは、さっぱりわからないということもあれば、立て続けに驚くこともあるでしょう。それは時と場合によって、いろいろです。ここでわかっていたいただきたいことは、仏法は事実を説いているということです。これまで見えていなかった自分の事実を聞いていく。見えない世界を知らされていく。だから、おもしろいのです。

今回は「まだ見ぬ今へ」という講題で話をさせていただきます。「今」とは目の前にある事実の世界です。今ここにいる自分のことを学ぶのだ、そんな心積もりで聞いていただければと思います。

いちばん大切なもの

さて、みなさん。人生でいちばん大切なものは何だと思いますか。命ですか。だけど、命があるということは、生きているということですね。だから、それは問いを反復しているだけで、答えにはなりません。ここでは、もう一步踏み込んでください。だけど、無理に答えを出す必要もありません。わからない問題については、答えを保留しておくというの、ひとつの態度です。人生でいちばん大切なことは何なのか。これもこの会で考えていくことです。

何を大切に生きていくべきなのか。これからみなさんは生きていく中で、いろんな教えにふれるだろうと思います。そこで気をつけてほしいことは、こうした大きな問題については、かんたんに答えを出せないし、また答えを出してはいけないということです。反対にいうと、こうした大きな問題に安易に答えを与えるような教えは危ないのです。「これが答えだよ」と明確に答えてくれる人がいたら、少し気をつけたほうがいいかもしれません。なぜかという、答えを出すということは、人生を決めてしまうことになるからです。僕たちは一人々々違います。去年の自分と今年の自分、来年の自分も異なるでしょう。だから、同じように大切にしたいことを問われても、今年と来年では別の答えを出すかもしれません。こんなふうに答えを出せない問題については、答えがないままにしておく、つまり開かれた状態にしておくということが、とても大切なことだと思います。

二番目に大切なもの

だけど大切な問題について、まったく答えがないままでは、さびしいですね。せつかく会に来てくれた甲斐がありません。そこで問いを変えて、少し別の角度から考えてみたいと思います。みなさん、人生で二番目に大切なものは何だと思いますか。一番大切なことがわからないのに、二番目に大切なことを考えるなんて無理でしょうか。だけど、僕はこの問いについては、はっきりとした答えがあります。

高校生のころ、富田靖子さんという女優がいて、僕はこの人のファンでした。自分の部屋に何枚もポスターを貼って、押入れには雑誌を重ねていたことを思い出します。この人はとてもおもしろい女の子で、夜空に流れ星を見つけたら、それが消えるまでに願い事を三回口にしたら、願いが叶うと信じているのです。だけど、流れ星が落ちるのなんて、あっというまです。願いを口にすると、たったの一回でも困難です。だけど富田靖子は天才なんです。流れ星が落ちていく一瞬に、「カネ、カネ、カネ」と三回つぶやいたというのです。彼女がその後、お金持ちになったかどうかは知りませんが、この話を聞いて、その機転の速さに僕はあいた口がふさがりませんでした。

お金って何なのでしょう。お金のことを考えない日は、僕は一日もないと思います。多くの方がお金を得るために働いて、お金を失うことを怖れています。だから、お金のために人生を狂わせることもあるだろうと思います。この本堂を見回しても、お金に関わらないものは、おそらくひとつもありません。ご本尊さえも、どこかの職人の手によるものでしょうが、ここに至るまでにはお金が介在しているはずです。社会全体がそうです。ここに今朝の新聞を持ってきました。円高、消費税、社会保障改革、企業の不祥事、東北の復興費用など、話題になっていることは、すべてお金にまつわる事柄です。いまや一国の首相が頭を悩ますことは、お金のことにばかりです。外交とか軍事とか教育とか、一見したところお金に関係しないような問題もありますが、そうした事柄も、やはり最後は経済力の問題に帰着します。

それで問題は「人生で二番目に大切なものは何か」でしたね。答えは、お金です。お金なしには生きていくことはできません。世界中のだれもが欲しているもの。それがお金です。だけど、お金は二番目に大切なものなのです。お金の力のために、僕たちは人生を狂わせてしまうことがあります。それは国家や社会のレベルでもありうるでしょう。どうしてそんな失敗が起こるかという、それはお金をいちばん大切なものと見誤ってしまった結果なのです。

お金をいちばん大切なものとすることはできません。お金が貯まっていくのは嬉しいかもしれないけれど、山ほど貯めて、臨終の床で通帳を眺めて、「ああ、いっぱい貯まった、嬉しいな」と満足して死ぬわけにはいかないでしょう。お金は正しく使うためにあります。つまり、いちばん大切なものに仕えるべき存在なのです。その意味で、お金を正しく二番目に位置づけることが、人生の課題とも言えるのではないかと思います。

だけど、お金を従わせるには、いちばん大切なものがはっきりしていないといけません。その大切なものとは、ひとつの答えではありません。それは道を求める姿勢です。住岡夜晃先生は「道を求めることのない人の一生は、そのまま死んでいる」と述べておられます。つまり答えを与えるのではなく、「道を求めよ、尋ねていけ」と教えておられます。みなさんの回りにも、長く仏法を聞いてきた方がおられることでしょう。そんな人でも、かんたんに答えを出すことはできません。なぜなら、どんな人も現役で生きているからです。生きているかぎり、予期しないことに出会います。いつも目の前に人や事柄があり、それが自分に問いかけてきます。そのたびに受けとめて考えて答えていく。それが生きるということだろうと思います。そうした方々に学ぶべきは答えではなく、道を求めていく生き方だろうと思います。もう一歩ふみ込むならば、そのように止まることなく道を求めていく生き方は、どうすれば可能なかということが、僕たちに与えられた課題ではないかと思います。

今

今回の講題は「まだ見ぬ今へ」です。言葉はやさしいけれど、なんだか意味が取りにくいかもしれません。なぜなら今というのは目の前にある、わかりやすい時間だからです。それが見えていないというのですから、わかりにくくて当然だろうと思います。

今朝から、仏教は何か特殊なことを説いているのではないと強調してきました。自分では気づいていなかった自分自身の事実を知らされていく、それが仏教を聞くということだと思います。この自分自身に出会っていくということ、それは言い換えれば、今という平凡な時間の意味が明らかになっていくことだと思います。その意味では、「仏教は今を拓く教え」(会座の案内文)とも言えるでしょう。

それでは今という時間について考えていきましょう。まず今の他にどんな時間がありますか。過去と未来ですね。ここにはないという意味では、過去や未来は現在よりも、ずっと難しい時間です。たとえば過去だったら、思い出さないといけません。自分のことでも思い出せないことがあります。さらに生まれる前の歴史となると、わざわざ本を開いて学ばなければなりません。歴史的事実とされることでも、あとから訂正されることもあるでしょう。未来となると、もっと不確かですね。天気予報などは身近なものですが、大変な技術の上に成り立っているのでしょう。それでも明日の天気さえ、雨マークだったのが、実際にはほとんど降らなかったということも、よくあります。だから、未来について語るときは「だろう」「信じる」「希望する」といった、あてにならない、あいまいな言い方をするしか他にありません。

ところが今というのは明らかな時間です。たとえば、今ここに机があります。これを「ここに机があると思います」とは言いません。ましてや「ここに机があると信じます」などと言ったら、かなり変です。あるいは、今日は好い天気です。これを「晴れているような気がする」とは言いません。ここに机があり、外が晴れていることは、明瞭な事実です。こんなふうに今というのは、とても明らかな時間です。この今について、いったい何を学ぶ必要があるのでしょうか。

阿難

浄土真宗で大切な経典とされてきた『大無量寿経』には、次のような一節があります。

尊者阿難 (...) 仏に白して言さく。「今日、世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔魏魏とまします。」

ここでの登場人物は世尊と阿難の二人です。まず世尊というのは、世にも尊い方という意味で、お釈迦様のことです。次に阿難というのは、釈尊の弟子のひとりで、ながく釈尊の身边にあり、お世話をしてきた人とされています。そのため、お釈迦様の行かれるところには、いつも付き従い、お話もよく聞いていますから、その意味で「多聞第一」と呼ばれています。ところがある日のこと、阿難が釈尊のお姿を見ると、お体が毛孔にいたるまで悦んでいるようであり(諸根悦予)、ご様子が清々しく(姿色清浄)、お顔が輝いていた(光顔魏魏)というのです。

それでは、その日の釈尊がよほど特別だったのでしょうか。おそらく、そうではないでしょう。釈尊は35才でさとりを開き、80才で亡くなるまで、一貫して同じ教えを説かれたと

伝えられています。このあいだ釈尊はさとの世界におられ、つねに輝いておられたはずで
す。ところが阿難はおそばにありながら、その輝きに気がつかなかった。それは別に不思議
なことではないと思います。なぜかというと、まわりの人がどう見えるかは、僕たちのここ
ろによるからです。たとえば難関校の受験会場では、他の受験生が賢く見えるかもしれませ
ん。また世間をばかにしていたら、どんなに立派な人が近くにいても、ただのおっさんかお
ばさんにしか見えないでしょう。もしも親鸞さんが夜のバス停にいたり、コンビニで買い物
をしていたら、僕などには、ただの爺さんにしか見えないでしょうね。だから、長くおそば
にありながら、阿難に釈尊の輝きがわからなかったということは、十分にありうることなの
です。それがあつた日のこと、初めてお釈迦様の輝きに気がついた。この「今日、世尊」という
阿難の言葉には「今初めてあなたの輝きに気づきました」という発見の感動が込められてい
るのです。それでは、それ以前の時間とは、いったい何だったのでしょうか。ここで確かめて
おきたいことは、僕たちが「あたりまえ」としている今という時間にも、もしかしたら見えて
いないことがあるということなのです。

親鸞

次は親鸞さんの話です。親鸞さんの主著、知っていますか。『顕浄土真実教行証文類』。長
いので通常は省略して『教行信証』と呼ばれています。この本の序文（総序）に、「遇い難く
して今遇うことを得たり」という言葉があります。何に出遇ったのかということ、真実の宗教、
浄土真宗に出遇ったというのです。遇という字には「たまたま」という意味があります。い
ろんな人生の縁があり、その中で恵まれて師となる法然上人と出遇うことができた。そして
法然上人を通して、浄土真宗の世界へとみちびかれた。その歓びが、この「遇い難くして今遇
うことを得たり」という言葉に込められています。その意味で親鸞の人生は、出遇いの以前
と以後で大きく二分されています。よほど大きな感動だったのか、主著の『教行信証』には
「建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」という、出会いの日時まで記されています。そ
れはこの日を境にして、初めて目が開いたという意味なのでしょう。それまでは、ものを見
ていても、見えていなかったということなのだと思います。

パウロ

目が開かれるという意味では「目からうろこ」という言い回しがあります。余談になりま
すが、これはキリスト教の教義を確立したパウロに由来する言葉です。パウロはイエス後の
原始キリスト教団を激しく迫害していました。ところが、ある日のことダマスコの近くで
「なぜ、わたしを迫害するのか」というイエスの声を聞き、地に倒れます。それから三日後に、
当地のキリスト教徒の手引きで教えに目覚め、「目からうろこのようなものが落ち (...) 元ど
おり見えるようになった」と、『聖書』（『使徒言行録』）に記されています。それは以前と同じ
ように見えるようになったという意味ではありません。このダマスコの回心と呼ばれる出来
事によって、初めてパウロは見えるようになったのでしょうか。それまでは大切なものが何も
見えていなかったことに、彼は気づいたのだと思います。

住岡夜晃

最後に、もうひとつ引用します。真宗光明団を創設された住岡夜晃先生の言葉です。長いので一部省略して、仮名遣いも整えています。

阿弥陀仏は永遠に現在の仏です。ですから現在をぬきにした人には、如来の大悲の願心はわかりません。(…) 現在が尊く、ありがたくなくて、どこに尊いありがたいものがあるでしょう。ありがたいとは、平凡であり、つまらなかった現在に対する驚きであります。如来は必ず現在に対する眼を開きます。

阿弥陀仏というのは、浄土真宗の本尊です。ですから、ここでは浄土真宗の教えの特徴が述べられていると考えてください。まず注意してほしいのは、冒頭の「阿弥陀仏は永遠に現在の仏です」という言葉です。浄土真宗が明らかにするのは過去でも未来でもなく、僕たちの現在です。それは、どんな時間でしょうか。毎日、いつも感動しているという人はいないでしょう。僕たちの日常は平凡でつまらないものです。ところが仏法は「必ず現在に対する眼を開く」のです。もしも仏様のお話を聞いて「ありがたい」ということがあれば、それは「現在が尊く、ありがたい」ということなのです。それでは、この尊くありがたい現在は、どこにあるのでしょうか。それは日々の日常と異なるものではありません。僕たちの平凡な日常が、尊いものとして発見されるのです。仏教は、決して遠い別の世界を説いているのではありません。あるものは、ただ僕たちの現在だけです。そのあり方が転回する。ある意味で、それがすべてだと言えるでしょう。阿難の「今日世尊」や親鸞の「今遇うことを得たり」という言葉には、現在のあり方が転換したときの感動が込められているのだと思います。

日常

住岡夜晃先生の言葉にもあるように、僕たちの日常は平凡です。なんとなく過ぎていき、充実感がありません。たしかにあるのは今だけです。だけど、この今が充実しないのです。それは今の前後にある過去や未来とも関係しています。多くの場合、過去には後悔があります。あのときこうしておけば、こんなふうにならなかったと思うことがあるでしょう。みなさん冬休みですから、一年を振り返る時期だと思います。学校の成績やスポーツや文化活動のことを考えて、満足できる人は少数派でしょう。たいていは、もっとがんばればよかったと思うのではないのでしょうか。みなさんくらいの年齢になれば、自分の素質を恨むこともあるでしょう。そうすると、今度は親のことを考えて、恨みっぽい気持ちになることもあると思います。また現在の日本は比較的恵まれています。自分が生まれてきた時代や社会を恨むということもあるでしょう。過去は、もうどこにもありません。それならば過ぎ去るにまかせて、今だけを生きればよいのですが、僕たちはそうはいきません。わざわざ辛い過去のことを考えて自分を苦しめ、現在を暗くするのです。

それでは未来はどうでしょうか。みなさんが描く未来は何色ですか。未来のことは、だれにもわからない。ならば、あれこれ考えずに未来のことは未来にまかせておくのが一番でしょう。ところが僕たちは未来への不安から、心配事を紡ぐことがよくあります。たとえば、中高生であれば希望の進学先に行けなかったらどうしようとか、就職できなかったらどうしようとか考えることがあるでしょう。それが、ほんの一瞬、頭をよぎるだけならまだしも、考え始めると心配で何も手につかなくなることもあると思います。

過去や未来はどこにもありません。ところが過去への後悔や未来への取り越し苦労に引き裂かれて、現在が無残なものになってしまう。それが僕たちの現在です。そんな取り越し苦労はつまらないからやめておけ、現在に打ち込めといわれても、そのとおりにならないのが人間です。過去や未来に引き裂かれて現在が充実しない。だけど現在を引き裂く過去や未来は幻にすぎません。いわば自分の頭の中で作り出した幻影で、自分自身を苦しめているのです。それは僕たち自身による自作自演といえるでしょう。平凡な日常を見る目が開かれるということは、実は自分から自分が解放されるということです。ところが自分で自分を解放しようと思っても、うまくいかない。そこに念仏（仏を念じる）ということが教えられる理由があります。だけど、その話は後にして、もう少し今という時間のあり方を考えていきたいと思います。

Ⅱ

充実しない「今」

なぜ今が充実しないのかという話をしています。一言でいうと、現在が過去と未来に引き裂かれるということでした。過去には後悔があります。だけど、それは単純に自分のせいとは言いきれないこともあります。もっと勉強していたらとか、もっとトレーニングしていたらというのは自分自身の問題だけど、自分ではどうしようもないこともあります。たとえば中学生になれば塾に通う人も多いでしょうし、スポーツ活動も本格的になります。だけど、塾もスポーツもお金がかかります。小学生も高学年になるとスポーツで能力のある子は、はっきりと目立ってきます。ですがクラブチームなどで本格的な指導を受けようとする、まとまったお金が必要です。特に最近は経済状況がきびしいので、能力はあっても家庭の事情でその道を断念しなければならない子も少なくありません。スポーツくらいならまだしも、高校や大学への進学など将来に直結する場面で思うようにならなければ、自分の境遇を恨むことになりかねないでしょう。

イスラム原理主義

日本にいと遠い話に思われますが、イスラムの貧しい国では原理主義による自爆テロが行なわれることがあります。それは洗脳に近い特殊な教育のせいだと説明されることもありますが、それだけでは問題を遠ざけるような気がします。一言でいうと、イスラム原理主義のような極端な思想は、未来への希望が持てない絶望的な社会で育まれます。反対にいうと、こつこつがんばれば未来が開けるといいう希望が持てる社会では、あのような極端な思想は受け入れられません。どうがんばっても、現在の悲惨な状況から抜け出せないという状況だから、暴力で一挙に社会を転覆しようという発想が生まれるし、広く支持されるのです。こうした意味で、国や社会や個人が希望を持てない状況に追い込まれるということは、できるだけ避けなければなりません。未来への希望を持てるということが、社会や個人の健全な発達をうながす条件のひとつなのです。

喧嘩をするときも、かりに勝てる喧嘩でも、相手に逃げ道を残しておくことが大切ではないかと思います。戦争でも喧嘩でも、相手を叩きつぶしたりしたら、深い禍根を残します。少し脱線しました。

今が充実するとき（スポーツ）

ここまで充実しない今について話をしてきました。だけど、そんなときばかりではありません。ときには今が輝くこともあります。欣喜雀躍という言葉があるように、まるでスズメみたいに、よろこびで飛び跳ねたいこともあるでしょう。それは、こんな感じではないでしょうか。お話ばかりで疲れたと思いますので、ここで一曲、聴いてもらいましょう。忌野清志郎の『気持 E』です。よかったら、一緒に踊ってください。(省略)

この曲は、わが家のヒットソングのひとつです。こんなに気持ちいいときって、どんなときでしょうか。たとえば、スポーツ選手が大きな大会で優勝したときは、こんな気持ちかもしれません。北京オリンピックで「超気持ちいい！」と叫んだのは、だれでしたか。水泳の北島康介選手ですね。何年も練習に励んで世界の頂点に立ったのですから、それは気持ちいいことでしょう。もう、言葉がない。気持ちいいとしか言いようがありません。それにみんなが共感したのは、自分も一緒に「気持ちいい」と叫びたいからです。同じ日本人として、少しだけ北島選手の歓びに与ったわけです。

恋

今が輝くとき。次の歌をご存知でしょうか。国語の教科書などで、見たことがあるかもしれませんね。

清水へ 祇園をよぎる桜月夜 今宵会う人 みな美しき（与謝野晶子）

作者の与謝野晶子は『明星』という歌集で活躍した人です。これは若いころの恋の歌です。与謝野鉄幹のもとへ、晶子は夜の京の町をかけていく。実は鉄幹には妻子があり、晶子は身を捨てた不倫のただ中にあります。燃え上がるような恋。胸の高鳴りが聞こえるようです。そのとき世界のすべてが美しく見える。世界のすべてに「然り」と言える。それが「今宵会う人、みな美しき」という言葉です。次の瞬間には消えてしまうかもしれない、彼女は小さな存在です。だけど体の底から、世界のすべてを祝福するほどの力がわいてくる。それが恋をするということでしょう。

ブルーハーツに『リンダ、リンダ』という曲があります。ふと思いついたのでCDの用意もありませんが、こんな歌詞です。

愛じゃなくても 恋じゃなくても 君を離しはしない
決して負けない強い力を 僕はひとつだけ持つ

君を好きだという思い。それは愛とか恋といった言葉を必要としない、直接的な感覚です。愛でも恋でもいいし、他人がそう呼ぶのなら悪でもいい。胸の底から湧いてくる「然り」という力ほど、確かなものはないからです。だから恋は世間を捨てることができるのでしょ。う。どんなにささやかでも、恋は今が輝くときです。

『愛の無情について』

余談になりますが、おもしろいことに、僕はこの年令になって発見がありました。それは恋とは何かということです。亀井勝一郎に『愛の無情について』という本があります。そこに人生で真実の言葉が語られるのは二回だけだと書かれています。それは「相聞の歌」と「辞世の句」です。それぞれ「愛の言葉」と「人生最後の言葉」という意味です。人間は嘘ばかり

で生きている。だけど、この二度の機会だけは、真実を語るというのです。まず人生の最後に本当のことが語られるというのは、よくわかります。大物政治家が晩年に回顧録を出して、長いこと隠してきた国家間の密約を暴露するといったことがあります。さすがに、あの世には嘘を持っていきたくないのでしょう。政治家ならずとも、だれしも人生が終わろうとするときには素直になるものではないでしょうか。その意味で「辞世の句」が、その人にとって真実の言葉だというのは、よくわかります。

だけど、どうして愛の言葉が真実なのでしょう。この本を初めて読んだ若いときには、さっぱりわかりませんでした。たぶん恋のただ中にあるときには、かえって恋とは何かわからないのでしょう。おそらく恋とは、男と女が存在の孤独の底で出会うことなのでしょう。それは非日常的な経験です。深い孤独の底で、存在と存在が出会う。だから、そこから「あなた」へと本当の言葉が語られます。恋には世間をこえる力があります。まちがえやすいのが恋と情欲の違いです。情欲は相手を選びません。相手を欲求の対象として見ることだから、情欲から出遇いの言葉は生まれません。だけど実際には、恋と情欲はないまぜではないでしょうか。本当の恋でも、情欲にまみれ苦しむということが通例ではないかと思います。それは真実と虚偽の葛藤でしょう。僕たちは生身の存在だから、どれだけ真実に近づいても、真実になりきることはできない。ここが大切なところだと思います。恋は尊い。若いみなさん、がんばってください。

事業

今が輝くとき。最後の例は、事業の完成です。みなさん大人になって、それぞれ仕事に就かれるでしょう。そこで一仕事を果たしたときに、深い満足感を覚えることがあるだろうと思います。これも今が輝くときですね。

ゲーテの『ファウスト』という作品をご存知でしょうか。主人公のファウストは、悪魔のメフィストフェレスの力で若返り、世界中を放浪します。ただ悪魔の力で若返るときに、もしも満ち足りて「時よ止まれ」と口にすれば、そのときは魂を差し出すという契約にサインしてしまいます。ところがファウストは晩年に大規模な干拓事業を行い、それが完成していく様子を悠々と眺めて深い満足を覚えます。そして「時よ止まれ、お前はあまりに美しい」とつぶやいてしまうのです。

自分の事業が完成していく様を見るのは、たしかに深い満足感を与えることでしょう。それは長年の苦労が報われることですから、当事者にとっては、美しい光景に違いありません。そのとき「時よ止まれ」と口にするのは、世界への肯定に他なりません。なぜ、それによって魂を失うことになるのか、さまざまな解釈が可能でしょう。ただ深く満ち足りてしまえば、メフィストフェレスに魂を奪われなくても、ファウストの歩みが止まってしまうことは確かです。いずれにしても、『ファウスト』に描かれた事業の完成による満足感は、多くの人が憧れるものではないかと思います。

最高の瞬間を求めて

スポーツや恋や事業を例として、今が輝くときについて考えてきました。こんなふうに今が輝くときも、実際にはあるわけです。僕たちは毎日のように、テレビや新聞やインターネットで、輝く人たちの輝く瞬間を見えています。そして、それをイメージしながら生きています。みなさん座談などで、自分が好きな歌の話などをされたら、おもしろいかもしれません。やはり若いときはアップテンポな元気な歌が好きなではありませんか。苦しいことや辛いこともあるけれど、最後には栄光が待っているといった、みんなで叫べるような右肩上がりの曲が多いのではないのでしょうか。どんな歌が好きかということは、その人の人生のイメージと関係しているのではないかと思います。

ただし、輝く瞬間を求める生き方には、大きな問題があります。次のニーチェの言葉を見てください。

恍惚とした瞬間のために生きる人間は、その反対の現実のために、たいていは悲惨で絶望的な気分の中にいる。彼らは、あの瞬間こそ本当の自分だと考える。そして、人生の大部分や世界を怨みの思いで生きるようになる。(『曙光』)

冒頭の「恍惚とした瞬間のために生きる」というのは、今が輝くときを求めて生きるということです。いつか自分も「超気持ちいい！」と叫んでみたい、そんな生き方です。そんな瞬間を実際に経験した人やそれを目指す人たちは、そのすばらしい瞬間こそ本当の時間であり、本当の自分だと考えます。だけど、そんな瞬間は文字通り一瞬です。そうすると、その他の時間はどうなるのでしょうか。それはつまらない時間や意味のない時間になってしまいます。ニーチェの文章の「その反対の現実」という言葉は、気持ちいいなどとはどうもいえない、平凡で退屈な時間のことをさしています。実際のところ、それが人生の大部分ではないのでしょうか。だから、すばらしい瞬間を求める生き方は、ニーチェが教えるように自分の人生を「悲惨」で「絶望的」なものにしてしまいます。つまり引用の最後にあるように、「人生の大部分や世界を怨みの思いで生きるようになる」のです。かりに過去にすばらしい体験をした人でも、その思い出にふけりながら生きてしまい、現在を見失うことになりかねません。

仏法が拓く今

始めのテーマにもどりましょう。「仏法は今を拓く教えです」というのが話の出発点でした。それでは仏法は、どのような今を拓くのでしょうか。次に住岡夜晃先生の言葉を引用します。

勝て！／断じて勝て／本質的に勝て！／勝利者でなくて真の人生を生きたといえるか
／順境にも勝て 逆境にも勝て／健康の日にも勝て 病気の床にも勝て／運命に勝て
汝自身に勝て／賞賛の中に勝て 非難迫害の中に勝て／勝って勝って勝ち抜く者の
力こそ願力であり／この稀有最勝人の名こそ南無阿弥陀仏である／しかり しようし
て真に勝つとは何ぞや／これ汝に与えられた課題である。

このなかに「勝て」という言葉が、いくつあるのでしょうか。ふつうの考え方では、健康は勝利ですが、病気は敗北です。新聞の広告欄を眺めると、健康に関係する商品が多いことに気づきます。健康を近づけ病気を遠ざけることが、僕たちの日常の願いだからです。ところが、ここでは「健康の日にも勝て、病気の床にも勝て」とあります。これは、どんなときも勝てということでしょう。つまり勝つとは、どんなときも「人生に然りと言う」ことだと思いません。それは別の言葉では「平凡であり、つまらない現在」に輝きを見い出すということだと思いません。阿難は釈尊に輝きを見い出し『大無量寿経』、親鸞は『教行信証』の序文（総序）に「遇い難くして今遇うことを得たり」と記しました。それは平凡でつまらない日常に見い出された輝きなのです。人間の現実は、さまざまです。その現実には、それぞれに然りと言え。それが仏法が拓く世界だと思えます。

『太陽がいっぱい』

それでは、どうすれば平凡な日常に然りと言うことができるのでしょうか。その手がかりとして、『太陽がいっぱい』(Plein soleil, 1960) というフランス映画を取り上げたいと思えます。よく知られた作品ですから、ご覧になった方も多いのではないのでしょうか。主演はアラン・ドロンという一世を風靡した俳優です。主人公はトムという若者。友人のフィリップは富豪の息子で、豪華なヨットを乗り回し、トムを手下のように使います。またフィリップにはマルジェという絵の中から出てきたような美しい恋人がいます。

太陽がいっぱいという表題には、二つの意味があります。まずは太陽が輝く地中海です。三人の若者は美しい地中海にこぎだします。この美しい海が物語の舞台です。ヨットの上で、フィリップとマルジェの恋人同士は、この海を満喫しています。ところが、そのあいだトムは船の甲板で奴隷のように働かされるのです。彼は友人を激しくねたみ、ぎらぎらとした燃えるような眼差しで恋人たちを盗み見ます。ここが大切なところ。太陽は輝いている(plein soleil)。だけどトムのところは晴れないのです。これが僕たちの日常ではないのでしょうか。どんなに空が晴れわたっていても、何か気になることがあると、まるできれいな水の入ったコップにインクを一滴落としたように、僕たちは世界を濁らせることができるのです。その意味で人間のここには、魔術師の力があると言えるでしょう。

映画にもどります。主人公のトムには金もなく恋人もいません。しかし、彼は賢い男です。そこで一計を弄し、友人をほうむる完全犯罪をもくろみます。さらにフィリップの名前で身分証明書を偽造し、友人のサインもそっくりに書けるように訓練します。こうして主人公は友人を亡き者にし、その富と恋人を奪い取ることに成功するのです。

映画のラストは衝撃的です。すべてを手に入れたトムは海辺のカフェでくつろいでいます。彼がこれほど開放的な表情を見せるのは、ここだけです。トムは給仕の女性に声をかけられて、気持ち良さそうに空を見上げ「太陽がいっぱいだよ(plein soleil)」と答えます。物語の中で、この言葉が発せられるのはここだけです。すべてが思い通りになったとき、初めてトムの世界にも太陽が輝いたのです。しかし、次の瞬間、帆船の錨にからまった友人の遺体が発

見され、トムの完全犯罪がついえます。そして最後に美しい海がスクリーンに映し出され、物語は終幕します。(講義では、映画の最後の場面をみんなで見ました。)

ころを問う

僕たちは、だれしも今が輝くときを求めています。しかし、たいてい今は平凡で退屈か、あるいは悲惨で絶望的です。それは自分を取り巻くまわりの世界に理由があると考えるのが、普通の発想です。ところが仏法は見方を逆転させます。つまり、そこにある太陽の輝きが見えないのは、あなた自身のころが覆われているからではないかと問いかけるのです。ほんとうは空は晴れていても降っていても、いいのです。かりにどしゃ降りでも、とてもいいことがあったら、僕たちには輝くような雨に見えることがあります。そんなときは、雨の中を傘も差さずに笑顔で飛び出していきたいような気分になることもあるでしょう。仏法は今を拓く教えです。それは僕たちのころのあり方が問われるということなのです。

III

外道と内道

こころが曇っていると、まわりの世界も暗くなります。もちろん世界が輝いて見えることもあります、それはたいてい自分の調子がいいときです。そんなときは、他人が自分のために何かを我慢しているのかもしれませんが。僕は学校に勤めているのですが、学校というところは会議が多いのです。それも何時間も続くことがあります。そんな会議には、みんなうんざりしているのですが、ただ退屈せずにすむときがあります。それは自分が主人公になって、延々と話しているときです。そんなときは不思議と疲れを感じません。だけど、まわりの人は早く切り上げてほしいと思っているに違いありません。

ここまで話してきたことは、本当の意味で今が輝くことは少ないということです。それはなぜなのか。たいていは自分の外に理由を探します。これを伝統的な言葉で外道といいます。これに対して仏教は、僕たち自身のこころのあり方を問います。だから仏教は別名として内道と呼ばれます。それでは自分のあり方を問うとは、どういうことなのか。それを考える材料として、次にある物語を読んでみましょう。

『ナポリを見る』

お配りしたのは『ナポリを見る』という短編です（末尾の資料参照）。作者はクルト・マルティというスイス人(1921-)。カール・バルトという神学者の影響を受けた牧師で、平和運動や貧しい国々の支援のために長く働いてきた人のようです。私的な話になりますが、ドイツのフライブルクという町で学んでいたときに、大学の授業で資料として配られたものを読んだのが、この短編との出会いです。ところがその後、作家名も作品名も忘れてしまい残念に思っていたのですが、最近になって、たまたまドイツ文学の作品集で見つけることができました。まるで若いときの友人に再会したような嬉しい気持ちでした。どうやら邦訳はないようですので、この機会に訳したという次第です。

まず『ナポリを見る』(Neapel sehen)という表題について。これは「ナポリを見てから死ぬ」(Neapel sehen und sterben)というドイツ語の言い回しに由来しています。ナポリはイタリアの都市ですが、とても美しい町だと言われています。つまり、たとえようもなく美しいものの比喩なのです。この言い回しの意味は、ナポリを見るまでは死ねないとも、ナポリを見たなら死ねるとも解せるでしょうか。ただし、この短編にはナポリそのものは出てきません。それでは物語の中でナポリに比すべき美しいものとは何なのか。それは、ゆっくり考えていきたいと思います。

要約

お話の内容はかんたんです。物語の場所は、1960年頃のドイツ（あるいはスイス）。高度経済成長が始まったころです。主人公は工場労働者のおじいさん。彼は40年間、この工場で働

いてきました。生産性を上げるために働きつづけ、何度も会社から報奨金をもらい、そのお金で近くに家も建てました。彼の人生は工場の発展のために捧げられてきたのです。夜、寝ているときも機械のリズムで、その手が震えます。そろそろ低賃金の仕事に替われと医者や上司はすすめますが、彼は首を縦にふりません。ところが、ついに病気になり職場を去ることになります。ここまでが物語の前史です。お話では、おじいさんは自宅で床に就いています。彼の家からは工場が見えます。しかし、彼は工場が嫌い。そこで庭に仕切り板を立てて、工場が見えないようにしています。ところが病状が重くなり、おじいさんの心境にも変化が現れます。

仕切り板

おじいさんの庭先には仕切り板があります。それは工場が嫌いからです。だけど、嫌いのは相手と深い関係にあるからです。初めて会った人を憎むことはできません。よく言われるように、愛と憎しみは表裏の関係にあります。「愛と憎しみ」をひとくくりにして、その反対を探すとしたら「無関心」になるでしょう。

主人公の老人の半生は、工場と切り離すことができません。彼は経済成長を続ける社会と歩調を合わせるように働いてきました。だから、その手は眠っていても「スタッカートの速さでふるえる」のです。それは人間のために工場があるのではなく、工場のために人間があるような職場でしょう。おじいさんは身を削って働いてきました。そのおかげで、彼は家族を養うことができました。だからこそ、工場が嫌いなのです。

しかし、庭先に仕切り板を立てれば、自分の視野もさえぎられます。この仕切り板を立てるといのは、とてもおもしろい比喩だと思います。僕たちにも、それぞれに嫌いなもの、嫌いものがあるでしょう。それは言葉を替えれば、遠ざけたいもの、見たくないものです。それを見ずにすますために、やはり僕たちもこころの中で仕切り板を立てているのではないのでしょうか。それは自分で作った自分だけの世界にたてこもるということです。いやなものを見ずにすむという利点がありますが、それによって僕たちは自分を広い世界から遠ざけることになります。

春の芽生え

自分だけの世界に閉じこもっていて気持ちいいのは、しかし、しばらくのあいだだけです。そのうち世界から自分を閉ざしているという息苦しさが生まれてきます。そう感じさせるのは広い世界の力です。広い大きな世界が、君が閉じこもっているのは狭い世界だと呼びかけてくるのです。それは狭いだけではなく、人工的に作られた虚偽の世界でもあります。真実が虚偽に虚偽であることを教えるのです。

このお話では、おじいさんの庭の中にも「春が芽生えた」とあります。彼の妻が言うように、そのうち「花ざかり」になるでしょう。小さな花は、大きな世界の力を受けてひらきます。それは仕切り板にさえぎられることのない、大きな世界の表現なのです。花が咲いている。それだけで、仕切り板が嘘くさく感じられるのではないのでしょうか。

そこで、おじいさんは仕切り板を取るように、家族にたのみます。ところが彼の妻はぎょっとします。もしかしたら、彼女は夫の死を予感したのかもしれませんが。なぜなら工場への愛と憎しみが、彼のこころを支えていたからです。おじいさんは、初めは二枚だけ板を取るようにたのみます。ここも、おもしろいところです。僕たちが嫌いな相手を受け入れるのも、やはり少しずつです。こうして工場の一部が見え、また少し仕切りを取ると、その分だけ工場が見えます。「病人の視線は、工場のうえをやさしく憩った」とあります。『ベルリン、天使の詩』というドイツ映画があるのですが、まるで天使が高みから人間世界をやさしく眺めるような、そんな幸せな描写だと思います。

事務所

それから、おじいさんは工場の煙突から煙がたなびき、構内をクルマが走り、朝夕に人々が入り出りするさまを目にします。おそらく四十年にわたる労働者としての歳月を、そこに見たのでしょう。彼は最後の板を取り去るように命じます。そこに隠れていたのは社員食堂と事務所でした。どうして最後に事務所が登場することになるのでしょうか。このような職場にはホワイトカラーとブルーカラーが存在します。ブルーカラーというのは、現場で働く作業員です。工場労働者のおじいさんは、これに当たります。ホワイトカラーの方は事務職です。スーツを着て、空調の効いた心地よい部屋で仕事をしているような人たちです。たいていは学歴も高く、会社の上層部に昇進していくような立場にあり、ブルーカラーよりも高い給料をもらっています。汗にまみれて働いている労働者たちから見れば、これほど憎い存在はないでしょう。

社員食堂は、もしかしたらホワイトカラーもふくめて、すべての職員が日常的に顔を合わせる場所だったのかもしれませんが。いずれにしても最後の一枚を取り去ることで、おじいさんは憎しみをこえたのです。だけど、ここでも彼は不平をこぼしながら板をはずすようにたのんでいます。ここも、おもしろいところだと思います。不平をこぼすのは、どこかで自分を守っているからです。憎んでいた対象を素直に受け入れることは、人間には不可能なのだろうと思います。

往生浄土

最後には工場の敷地のすべてが見えたとあります。実際には、ベットに横になっているおじいさんが、工場の全景を目にすることはできないでしょう。ここは、こころの中で工場の存在を受け入れたという意味だろうと思います。そのとき彼の表情には微笑みがひろがります。そして数日後に、この世を去っていきます。ここで語られていることは、伝統的に往生浄土と呼ばれてきたことに近いと思います。今回のテーマでいえば「まだ見ぬ今へ」です。憎しみの壁が取り払われたとき、大きな世界が彼のこころに広がりました。ただし、それは初めからそこにあった世界なのです。その世界を受け入れるために自分の力で壁を取りのぞこうとすることを、伝統的に自力と呼びます。もちろん、実際に仕切り板を取るように命じたのはおじいさんであり、作業をしたのは近所の人たちです。しかし、おじいさんをそのよ

うに促したのは春の力でした。この春の力を本願他力と呼びます。花をひらかせた春の力が、おじいさんに広い世界を教え、仕切り板の向こうへといざなったのです。

工場の存在を受け入れて、おじいさんは死んでいきます。彼の表情には、満ち足りた微笑みがありました。人間は、つねに愛や憎しみの中で生きています。愛や憎しみとは、言い換えれば、自分だけがかわいいという見方です。このような愛憎が人間を真実から遠ざけていきます。だから生きている限り、真実そのものとひとつになることは難しいのです。ギリシアの哲学者は、人間は神でもなく動物でもないと述べています。つねにその中間で不安定な状態にあるのが人間なのでしょう。言い換えれば、生きていくかぎり人間は真実とひとつになることはできず、愛憎や不正にひらきなおることもできません。

真実の世界を浄土と呼びます。浄土とは文字通り、人間の愛憎でゆがめられない淨い世界のことです。愛憎を捨てて浄土へとおもむくことが往生浄土です。しかし、それは愛憎の巢であるこの身が果てたときに初めてかなうことだと、先人は教えてきました。ここには人間への深い洞察があるように思います。

IV

走る

最後の一時間になります。今回の会座に来てくれた人のなかには、何人か陸上部で長距離走をやっている人がいますね。そこで質問です。走るために必要なものは何でしょうか。まずは部活になればランニングウェアに着替えるでしょう。できるだけかっこいいウェアの方が、気持ちも乗ります。それからランニング・シューズもいるし、アンツーカーのトラックで走るときはスパイクも必要でしょう。だけど、もっと大切なものがあります。そうです、足です。さらに大切なものは、そう大地です。これが求めていた答えでした。

部活の仲間には速い人も遅い人もいると思います。だけど、どちらにしても必要なのは大地です。レースの途中で走るのをやめて、寝っころがるにしても、そこに大地があることが絶対的な条件なのです。だけど走るためには大地が必要だとは、たいてい、だれも考えません。お金を払わなくても、感謝しなくても、大地はそこにあるからです。すべての人が支えられながら、だれも気付かないもの。それが大地です。

差別（相対）

それでは、どうして大地に気づくことができないのか、もう少し考えてみましょう。実際にスタートラインについたら、何よりも他の選手のことが気になるでしょう。今からスピードを競うというのですから、だれが一番速いのか、自分は何位になれるのか、だれしもそれが気になります。もちろん、だれもがいつも足の速さを気にしているわけではありません。僕たちは、それぞれに気にしていることがあります。新約聖書『マタイによる福音書』(6/21)には、「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」と記されています。ここで富といわれているのは、その人にとって一番大切なもののことです。そのひとが一番大切にしているもの、そこに、その人自身が存在しているのです。

ある女優さんがクルマの運転をしていて事故に遭い、気づくと顔から血が出ていたそうです。そのとき女優さんは、おもわず「カオ、カオ、カオ」と叫んだそうです。彼女にとっては、何よりもカオが大切なものだったのでしょう。そのような人は街を歩いていても、いつも自分と他人の顔を比べているものです。僕は若いころ、武道をやっていました。徒手空拳の格闘技です。そのころは街で強そうなやつとすれ違ふと、いつも、あいつと俺とケンカしたら、どちらが勝つだろうと考えていました。要するに、それぞれにがんばっていることがあり、その分野で自分と他人を比べることに忙しくて、足もとを見る余裕などないのです。

とりあえず「あなたの富」とは、僕たちが求めているもの、がんばっていることと考えていざらうと思います。その人が気にしているもののところに、その人の存在があります。その意味では、富とは否定的なものの場合もあります。それは嫌いなもの、憎いもの、遠ざけたいものです。僕はいじめられっ子だったので、学校に行くと、いつも、いじめる連中のことを気にしていました。上級生に執拗にいじめられていたときには、あと何日すれば、そい

つが卒業するのかと指折り数えていました。この他にも学校の成績やスポーツや友達関係や家庭のことなど、それぞれに気にしていることがあると思います。それも、やはりその人の富なのです。

このように僕たちは自分に関心のあることで、他人と比べあって生きています。これを相対差別の世界といいます。いつも、まわりと自分を見比べて、広い世界を忘れているのです。

凡夫

ただスタートラインにつけば、当然、どちらが速いか気になりますし、それで頭がいっぱいになるでしょう。女優さんは、どうしてもカオのことが気になるでしょう。決して、それではいけないと言っているわけではありません。僕たちは、そのようにしかありえないのです。このような人間のあり方を仏教では凡夫と呼びます。その意味では、世界最速のランナーも女優さんも、みんな凡夫の仲間です。

ただし凡夫というのは、他人をさしている言葉ではありません。小さなことに振り回されて、大きな世界を忘れていたという自己認識の言葉です。もしも自分が凡夫であるとわかったら、そこには小さな自分を受けとめている大きな世界を発見した感動が込められているのです。親鸞さんは自分のことを「煩惱具足の凡夫」と呼んでおられます。ある意味では、これは絶望的な言葉です。食べるときは、うまいとかまずいとかしか考えられず、小さなことで躍り上がって歓んだり、目の前がまっくらになったりする。それが人間の現実でしょう。自己関心の仕切り板に閉ざされて、一步も外に出ることができない。それが煩惱具足の凡夫です。けれど、凡夫がそのままに大きな世界に抱かれていることがわかった。だから凡夫という名告りには、大きな世界に出遇った歓びが込められているのです。『教行信証』の序文（総序）には、「遇い難くして今遇うことを得たり」という言葉があります。この「今」という言葉にも、同じ感動が込められているように思います。

大きな世界に抱かれて小さな自分を生きていく。これが浄土真宗です。だから、どんな現実も、そのままに生きていくことができます。どのような人もそのままに大きな世界に出会っていきける。これが大乘仏教だと思います。

空（くう）

ここまで大きな世界という言葉で話そうとしてきたのは、浄土のことです。浄土は伝統的に、水や空や大地の比喻で語られてきました。水や空や大地は、あらゆるものをそのままに受け入れて、しかも受け入れているという意識がありません。ところが人間には「してやった」という意識が付いて回ります。この意識でふれると、浄土が穢土に変わります。穢土というのは、人間の意識で汚れてしまった世界のことです。

仏のさとりのことを空（くう）といいます。なんだか難しい話のようですが、古代インドで空（くう）の語源にあたる言葉は、ただの空（そら）を意味していたそうです。空（そら）は文字通り空っぽです。だから鳥も獣も人間も、そのままに受け入れられるのです。同じことを親鸞聖人は「いろもなし、かたちもましまさず」（『唯信抄文意』）と言っておられます。真

実の世界には色もなければ形もない。もしも世界が朱色であれば、他の色は朱色を汚すものとして受け入れられません。もしも世界が三角であれば、その世界には他の形は入ることができないでしょう。だから、すべてをあらしめる世界には色もなければ形もないのです。

愛情

だけど、それだけでは何もない空間が広がっているだけみたいで、まったく意味が感じられないでしょう。それに空とか大地とか言われても、まわりには天井と畳くらいしか目に入りません。僕たちが受け入れられているという事実を如実に感じるのは愛情です。エーリヒ・フロムという社会心理学者の『愛するということ』(The Art of Loving)という本に、「兄弟姉妹には同じ親の愛情に育まれた連帯感がある」という意味のことが記されています。人間同士が向かい合えば、たいてい、お互いの違いが目につきます。兄弟姉妹でも、そうでしょう。外から見たらよく似ていても、たいていの人が自分と兄弟姉妹は、全然似ていないと主張します。だけど、いったん事があれば兄弟姉妹は協力します。それは親の愛情に育まれてきた家庭の記憶があるからです。それが、その人を受けとめる大地なのです。

親は子供が生まれる前から気をくばり、自分が死んだあとのことまでも配慮します。子供が反逆するときも、親は親であることを止めません。親は子よりも大きく、子を包み込みます。だからでしょうか、浄土真宗では仏様のことを「親さま」と呼んできたようです。

五百円札の話

空には色もなく形もありません。そんなものには、実際には気づくことができません。愛情も同様です。愛情というものは、こころのあり方です。だから、そのままでは目には見えませんし、感じ取ることもできません。僕たちが愛情を感じるのは、それが言葉や行いで表現されるときでしょう。そんなことを考える手がかりになりそうな記事を見つけました。倉本聡という人の「北の国から TPP を考える」という文章です。

高校生の頃、本当にうちは悲惨な状態だったんです。そういうときにおふくろがお年玉でくれた五百円札は、どうしても使えなかった。他の五百円札は使えるんですよ。でもおふくろの五百円札は五百円を示す紙切れじゃなくて、もっと大事なものとして自分の中にはあるわけですよ。愛情が注がれているから価値が上がってくるんですね。(倉本聡「北の国から TPP を考える」朝日新聞 2011.12.9)

とりあえず五百円札の客観的な価値は、その額面通りの交換価値です。だけど倉本さんには、母親がお年玉としてくれたお札には、それ以上の価値がありました。それ以上というのは千円とか一万円という意味ではなくて、数値では量れない価値です。そのお札は母親が身を削って自分を育ててくれた事実そのものなのです。もちろん、お札は紙切れであり、お母さんは、もうおられないのかもしれませんが。だけど、お年玉の五百円札を見ると、お母さんの記憶が如実に呼びさまされる。倉本さんにとって、そのお札にはそんな力があつたのです。

親の愛情は尊いものです。それでも親は仏様ではありません。なぜなら親の愛情は自分の子供に限定されているからです。たしかに子供から見れば、母親の愛情は仏心にも等しいものでしょう。だけど、親の立場からいえば、親から子への愛情は、ときには他人の子を排除するエゴイズムにもなりえます。親の愛情は仏の慈悲によく似ている。それでも仏様を「親さま」と呼ぶのは、あくまでも比喩なのです。お年玉の話は胸を打ちます。しかし、それが実際に働きをおよぼすのは、それをもらった少年だけにとどまります。お母さんの愛情は文字通り、息子一人に注がれていたからです。

名号

このような場所では、ことあるごとにお念仏を称えます。だけど、念仏って何なのでしょう。よく意味もわからないし、これほど奇妙な言葉も他にないと思います。僕たちを受けとめる大きな世界。それが僕たちに呼びかける。いつでも、どこでも、あなたをあなたのままだけに受けとめています、と。それが南無阿弥陀仏です。親鸞聖人は「念仏申すのみぞ、すえとおりにたると大慈悲心にてそうろう」（『歎異抄』）と述べておられます。つまり南無阿弥陀仏は、愛情の言葉なのです。倉本さんのお母さんは、こころを込めて息子にお年玉をあげました。だから、そのお札はお母さんの愛情の形であり、お札を見ると倉本さんは母親の愛情を思い出します。それと同じように、大きな世界が言葉となって僕たちに呼びかける。それが南無阿弥陀仏です。その言葉を聞くことで、僕たちは大きな世界を思い出すのです。

大きな世界が言葉になった。その呼び声を名号といいます。呼びかけられて、僕たちは初めて大きな世界を思い出します。そして、「ありがとう、ほんの少しだけ思い出すことができました」と返答します。その言葉が念仏です。呼びかける声の名号で、答える声も念仏です。どちらも同じ南無阿弥陀仏。大きな世界に呼びさまされて、大きな世界へと帰っていく。だから、どちらも同じ南無阿弥陀仏です。

智慧と意欲

名号に呼ばれて返事をする。それが浄土真宗のすべてだろうと思います。名号は智慧を与えます。僕たちの日常は仕切り板だらけです。その小さな世界は虚偽ですよ、本当の大きな世界に帰るなさいと名号は教えます。いわば足だけで走っているつもりの僕に、大地の働きを教えるのです。名号に呼びかけられるということは、真実に呼びかけられて虚偽が虚偽とわかるということです。だから名号は智慧なのです。

次に名号は意欲を与えます。仕切り板に囲まれた世界では、僕たちはひとぼっちです。そこは孤独で殺伐とした世界でしょう。だけど大地はにぎやかなところ。走る人や散歩する人だけではなく、一休みしている人や木の上から見物している人もいて、みんなが大地の仲間になるからです。そこには獣や草木の姿もあることでしょう。真宗で朝夕にとなえる『正信念仏偈』には「必獲入大会衆数（必ず大会衆の数に入ることを獲る）」という一節があります。大会衆というのは、たくさんの仲間たちということです。名号を聞くことで、そのメンバー（数）の一人になるということです。

真宗大谷派に「ばらばらで一緒」というスローガンがあります。僕たちの日常は「ばらばらで、ばらばら」です。それが大地を見出すことで「ばらばらで一緒」になります。それは個人を集団としてまとめるという意味ではありません。また、どうせ人間は同じようなものだという意味でもありません。だれしも一人々々、異なります。それが共なる大地を見出すことで、兄弟姉妹のような連帯感が生まれるのです。それが「ばらばらで一緒」ということでしょう。実際には、僕たちが大地を見出すのではなく、大地に呼びかけられて、わずかながらも大地の感覚を取りもどすというほうが正確だろうと思います。

明治時代の真宗の改革者である清沢満之(1863-1903)は、「私はこの如来を信ぜずしては、生きてもいられず、死んで往くことも出来ぬ」(「わが信念」)と述べています。如来と大地、それぞれ言葉は異なりますが、言おうとしていることはひとつです。生まれて生きて死んでいく、そのすべての営みがなされるところが大地です。

『千と千尋の神隠し』というアニメのテーマソングには「生きている不思議、死んでいく不思議。花も風も街も、みんなおなじ」という一節がありました。これも同じことを歌っているのだと思います。名号に呼びかけられて大地を感じるができるなら、すべてのものが仲間になり、ともに生きていこうという意欲が生まれます。名号は生きる意欲を与えるのです。

ここまで、「まだ見ぬ今へ」というテーマで話をさせてもらいました。今は、みんなに与えられている共通の事実です。だけど、僕たちは今を知りません。今とは大いなる大地のことです。今へと拓かれていくことが、僕たちの願いです。この願いを呼びさまし実現するのが名号なのだと思います。(おわり)

V

特別編：『ローラーガールズ・ダイアリー』(Whip It, 2009)

昨夜(二日目)は一緒に映画を見て、みんなで議論しました。そこでこの時間は予定を変更して、僕も感想を話させてもらいます。そのために印象に残った三場面を取り上げるつもりです。

まずは内容をおさらいしましょう。物語の舞台はテキサスの田舎町。美人コンテストを通じて社会の表舞台に立てるように母親にしごかれていた少女ブリスが主人公でした。ところが彼女は母親の型にはめられる生き方がいやになり、次第にローラーゲームという場末のB級スポーツに夢中になっていきます。そして家出同然に飛び出して男の子とも付き合いますが、うまくいきません。ブリスは深く傷ついて家にもどり、両親と和解します。それから彼女はローラーゲームに打ち込むことを決め、自分の道を歩み出していきます。

初めて歩いたとき

この映画で僕が一番気に入ったのは、少女が初めてローラースケートをする場面です。おそらく小さいころに、少しはすべったことがあるのでしょうか。たどたどしくも、道路の真ん中をゆっくりと進んでいきます。その姿をカメラが街路の正面から映し出します。このとき道には、だれもいません。おそらく彼女の姿に観客が集中できるように、余計なものを取り除いたか、それとも人気のない早朝に撮影したのだと思います。このときローラースケートに集中しているブリスには、他のものは何も見えないはずです。その意味で、これは彼女のこころの風景でもあるのでしょうか。

この場面を見ていて、僕はとてもなつかしい気持ちになりました。それは自分が初めて二本足で歩こうとしたときの記憶です。もちろん実際には、そんなことは覚えてはいません。だけど、この場面から、僕は自分が初めて歩こうとしたときの不安や喜びを如実に感じたのです。どうして人間は歩こうとするのでしょうか。体ごと大地に伏せていれば、とても安定しています。二本足で立ちあがるのは、あえて不安定になることです。だけど、それによって初めて世界が拓けます。いのちとは何かと問われるならば、それはみずから伸びようとするものだと思います。飛びたい、跳ねたい、踊りたい。伸びていくことが、いのちの喜びです。ただし人間には身体だけではなく、こころや精神の成長という側面があります。二本足で立ちあがることは、身体の成長の一場面と捉えられるかもしれませんが、それ以上に、初めて精神の世界へ踏み出すという意味があると思います。それはすばらしい一歩であるだけではなく、恐れやおののきをともなう不安な一歩でもあるのでしょうか。ただ、その一歩を僕たちはみずから欲しているのではないかという気がします。

音楽

ところで、この場面では静かで透明感のある音楽が流れています。この曲は、いったいどこから聞こえてくるのでしょうか。

映画で使われる音楽は大きく二種類に分けられます。たとえば、この後でロックバンドが登場しますが、そこで聞こえてくるのはスクリーン上でバンドが演奏しているものです。つまり映画の中の特定の場所から聞こえます。ところが、この場面は異なります。ここで聞こえてくるのは、少女の不安やときめきによりそのような、映画の〈中〉から聞こえてくる音楽なのです。この曲はローラーゲームの決勝戦の後で、お母さんと和解する場面でも流れています。この曲への制作者の深い思い入れが感じられるようです。この音楽がどこから流れてくるのかと問われるならば、おそらく主人公の少女の存在から響いてくるのだと言えるでしょう。もしかしたら僕たちにも、それぞれの存在の底に流れている音楽があるのかもしれない。その響きを聞きあてることができたら、幸せだろうと思います。

ローラースケートという小道具

主人公のブリスは、これまで美人コンテストで入賞するために母親の言いなりになってきました。ところが、ひょんなことから彼女はローラーゲームを知り、長いことしまっておいたスケート靴を取り出します。そして先ほど見たように、おそろおそろすべってみるのです。この場面は母親からの独り立ちを意味しています。なれないスケートで怪我でもしたら大変です。母親が知ったら、その場で禁止することは目に見えています。その意味では、彼女の挑戦は別のスポーツでもよかったのかもしれない。

それでも、このローラースケートという小道具には展開の妙があるような気がします。なぜならローラースケートは歩くことの延長上にあるからです。それは親の庇護を離れた別次元へと歩むこと、あるいは子供時代とは違う異次元の世界に入ることを暗示しているのです。

だれしも幼いときに一度目の独り立ちをします。そして思春期に二度目の独り立ちを迎えます。そこには独立の歓びだけではなく、虚空に投げ出されたような強い不安もあることでしょう。だれにも支配されない、しかし、だれにも支えられないという両義的な感覚です。それは、どこに落ち着くかわからない危険な時期でもあります。しかし、映画の主人公はローラースケートのこつをつかみます。そしてアルバイト先のレストランでも自由に乗り回すようになります。それは彼女の独り立ちが順調に進み、ブリスが母親の知らない自分の世界を築き始めていることを示しています。

バスに乗る

それでは最初の場面にもどりましょう。初めてのローラースケートのあと、ブリスがローラーゲームの入団テストのために、町を出る場面があります。このとき彼女はバスに乗ります。それはごく普通の乗り合いバスです。ところが彼女は不安な面持ちで「私も乗れますか」とたずねます。なぜなら、これは新しい人生へと踏み出すバスだからです。(おそらく、この場面で制作者は『卒業』という有名な作品のラストシーンを意識したのではないかと思います)

す。)もしかしたら、みなさんも独り暮らしを始めるとき、いつものバスや電車に乗り込むのにも、普段とは違う感覚を覚えるのではないかと思います。

ブリスはバスの乗り口で不安な表情で運転手を見上げます。そしたら運転手は当然のように「乗りなさい」と身振りで応えます。彼女のこころの震えと安堵が伝わるような場面です。バスに乗り込むと座席について、隣のおばあさんと言葉を交わします。彼女は「すてきな髪の色ですね」とほめ、おばあさんは「自分で染めているの」(I do it myself.)と答えます。この何気ないやりとりも、自分の人生は自分の手で染めていくものだ彼女に教えているかのようです。バスの窓には、見なれた町の風景が流れていきます。学校、クラスメート、バイト先のレストラン。旅立とうとするブリスには、そうした日常の風景が遠くに感じられるでしょう。

台所

次に見てもらいたい場面は台所です。両親にローラーゲームのことがばれてしまい、ブリスは家を飛び出します。ところが付き合い始めた彼の裏切りに傷つき、家にもどってきます。しかし家には、だれもいません。そこで彼女は台所に座り込み、両親の帰りを待っています。

みなさんの家の中にも、いろんな部屋があると思います。たとえば床の間がもうけられた居間などは、どちらかという「かくあるべし」という理想や主義が掲げられるところでしょう。そこは両親に背いて家を出たブリスがもどる場所ではありません。これと対極的なのが台所でしょう。そこは食の場所です。つまり、一緒に食べてきたという人間関係の原点をなす場所なのです。これは余談になりますが、だれかと仲良くなりたいと思ったら、何かと一緒に食べるのは良い方法の一つです。僕が若いころは、焼肉を食べているカップルは「できている」という俗説がありました。たぶん人間関係の深さに応じて、食べるものも脂っこくなるのではないかと思います。実際のところ、出会ってすぐにステーキや焼き肉を食べる男女は少ないのではないかと思います。

話をもどします。今、ブリスは台所に腰を下ろしています。ここでは放心したように座り込むことが、大切なのだと思います。もはや彼女に自分の正当性を主張したり、母親の教育を責めたりする気持ちはありません。すべてを失って帰るところ、そこが自分の育った場所であり、家庭の台所なのです。帰宅した母親もブリスのそばに座ります。母親は娘をミスコンテストに仕立て上げ、上流社会に送り込もうとしてきました。しかし、傷ついた娘を前にして親としての野心がくずれ、彼女も人間としての原点に戻ったのです。

このとき二人は冷蔵庫をはさむように座っています。その扉に何があったか覚えていますか。答えは赤いハートのマグネットです。まるで百元ショップで売っているようなやつです。親子の愛情というものは、冷蔵庫に貼られた安物のマグネットみたいなものです。そこにあっても、ふだんはまったく気づくことがありません。それはすべてを失って座り込んだときに、初めて目に留まるようなものなのでしょう。これも余談になりますが、文学や映画では大きな物語の展開よりも、あってもなくてもいいような小道具が大切なことがよくあります。ここでのハートのマグネットも物語の展開には何の影響も与えません。だけど映画のス

タッフは「できれば気づいてください」という気持ちで、こっそりとこの場面にマグネットを忍び込ませたのだと思います。

二番目で生きる

最後に取り上げたいのは、ローラーゲームのメンバーが決勝戦で敗れて、高らかに「あたしらナンバーツー」(we are number two!)と連呼するところです。映画の前半でも、彼女たちが同じように声を合わせる場面がありました。そこではチームは負け試合の後で「どうせ二番よ」と自嘲していたのです。彼女たちは人生のどこかで負けた記憶があり、現在も社会の底辺で生きているという負い目があります。母子家庭や低賃金で働く生活の苦しさも描かれています。しかも、舞台はテキサスの田舎町です。レストランの客が評するように、よそ者は立ち寄りもせず、立身出世をめざす若者はここを出ていきます。しかし彼女たちは、この二流の町にしがみついて生きていくしか他にないのです。

このような女性たちの社会的地位を象徴するのがローラーゲームです。かりにトップまで登りつめても、全米でスポットライトが当たるようなスポーツではありません。それはどこまでも日の当たらないB級スポーツなのです。だから彼女たちのナンバーツーというかけ声には、自嘲のひびきが込められていました。彼女たちの人生に日が当たることはないのです。

ところがチームに若いブリスが加わり、彼女たちは本気になります。その後の展開は一緒に見てきたとおりです。優勝は逃したものの、女性たちは全力をつくす満足感を体験します。それによって、彼女たちは卑下することなく、充実した二番手の人生を送るという生き方を学んだのです。

ラストシーンは、レストランの屋根の上から静かに町を眺めるブリスの姿を映します。これからも少女はこの町で生きていくことでしょう。ナンバーツーの町で、ナンバーツーのスポーツに打ち込み、ナンバーツーとして生きていく。「ささやかで名もないけれど、私はこの町で生きていきます。」主人公の少女は、そう決めたのです。このような生き方の旗印となるのが、決勝戦の後の高らかな「あたしらナンバーツー」でした。この呼び声に、僕は深い感動を覚えます。おそらくチームのメンバーは満ち足りた思いで、それぞれの現実へと帰っていくことでしょう。ここには住岡夜晃先生の「念仏申して自己を充実し、国土の底に埋もるるをもって本懐となすべし」という言葉に通じるものがないでしょうか。この映画を見ていて、アメリカの念仏は **we are number two!** かもしれない。そんな気がしました。

ナポリを見る

クルト・マルティ作（ねこ訳）

彼は仕切り板を立てた。仕切り板が彼の家から工場を見えなくした。彼は工場を憎んでいた。彼は自分が従事する機械を憎んだ。彼は自分が速めていた機械のテンポを憎んだ。報奨金が与えられる出来高仕事のせわしなさを彼は憎んだ。報奨金のおかげで、彼は豊かさと家と庭を手に入れたのだ。妻が昨夜もふるえていましたよという度に、彼は妻を憎んだ。彼女がもうそのことを口にしなくなるまで、彼は妻を憎んだ。しかし彼の手は眠っていても、ふるえていた。作業のスタッカートの速さでふるえていた。彼は健康に気をつけなさい、もう出来高払いの仕事はおやめなさい、という医者をも憎んだ。彼は別の仕事をやるから出来高払いはもうやめろ、という職長をも憎んだ。彼は嘘だらけの思いやりの数々を憎んだ。彼は年寄り扱いされたくなかった。今より安い日給など欲しくはなかった。なぜなら思いやりの数々はかならず安い日給につながっていたからだ。その後、彼は病気になった。四十年間の労働と憎悪のはてに、初めて病気になった。彼はベットに横になり、窓の向こうを眺めた。彼は自分の庭を見た。庭の端には仕切り板があった。その先は何も見えなかった。工場は見えなかった。ただ庭には春が芽生え、日光に焼かれた板の壁があった。すぐにまた出られるようになるわよ、ほんとに花盛りだからと妻はいった。彼は妻のいうことなど信じなかった。がまん、がまん、きっと良くなると医者はいった。彼は医者など信じなかった。三週間後、彼は妻に惨めだといった。見ているのは、いつもこの庭だけだ。他には何も見えない。もうあきあきした。いつも同じ庭ばかりだ。いまいましい壁から板を二枚取ってくれ、そしたら別のものも見えるだろう。妻はぎょっとした。彼女は近所にかけていった。ご近所さんがやって来て、壁から仕切りを二枚はずしてくれた。病人は壁の空いたところから向こうを見た。工場の一部が見えた。一週間後、彼は文句をいった。見えるのは工場の一部だけだ。これでは気晴らしにならない。ご近所さんがやって来て、仕切り板の半分を取ってくれた。病人の視線は、工場のうえをやさしく憩った。煙突のうえで煙がたゆたい、構内にクルマが出入りし、朝には人々の流れが工場に入り、夕方には出て行った。十四日後、残りの半分の壁も取り去るようには彼は命じた。事務所がぜんぜん見えないし、社員食堂も見えないと彼は不平をこぼした。ご近所さんがやってきて、彼が望むとおりにしてくれた。事務所と社員食堂を目にして、こうして工場の敷地のすべてを見たとき、病人の表情に微笑みがひろがった。数日後に彼は死んだ。

(Kurt Marti: Neapel sehen. 1960)